我等は羊の夢を見る

藍沢光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
我等は羊の夢を見る

【Ｎコード】
Ｎ０５７７Ｙ

【作者名】
藍沢光

【あらすじ】
『普通』を好む少年・天草司。
病を患う司の妹・天草陽香。
二人は、ごく『普通』の日々を過ごしていた。
だが、ある出会いにより、二人の運命は少しずつ動き出す。
これは、とある兄妹と、一人の『羊』の物語。

プロローグ（前書き）

こんにちは
藍沢光と申します。

現在二次創作の方で、仮面ライダーを書いているのですが、何を血迷ったのか、オリジナル作品を投稿させていただきました。

こちらは
月1くらいで更新しますので、のんびりまったり見ていただけると、ありがたいですね。

駄文ですが、よろしくお願いします！

プロローグ

「『人』の『夢』と書いて、『儚い』と読む？
そんなの嘘だね。
『人』の『夢』ほど、確かなモノはないよ」

最初に言っておくが、これは俺の言葉ではない。
これは俺の友達の言葉である。

俺が思うに、『人』の『夢』は『儚い』ものだ。

例えば、パイロットになりたい。
例えば、お花屋さんになりたい。
例えば、仮面ライダーになりたい。
例えば、お父さんのお嫁さんになりたい。

子供が持つそんな『夢』は、時の流れ、つまりは、成長によって脆くも崩れ去る。

中には、それを叶える奴もいるかもしれない。
だが、大半は挫折する。
無理だ、と。
できるはずがない、と。

俺にも『夢』があった。
だけど……諦めかけている。

今までの十七年の経験を踏まえて、『人』の『夢』は『儚い』。
そう言える。

だが、そいつはそれを否定した。
しかも、言ってのけた。
『儚い』のは、むしろ『現実』の方である、と。

もう一度言うが、これは俺の友達の言葉だ。

……いや。
友達ではないか。

可笑しな可笑しな奴。

『夢』に巣食う一人の『羊』の言葉である。

1：妹

ヒーローになりたい。

それが俺の子供の時の夢だ。

勿論、そんな夢を抱いていたのも、大体小学校に入るまでのことで、小学校に上がるとまた別の夢をみていた気がする。

まぁ、幼い頃の夢なんてそんなものだろう。

だから、今それを振り返って懐かしみはすれど、恥ずかしがることも馬鹿にすることもない。

つまり――

「天草！　天草司（あまくさつかさ）！」

自分の名前が呼ばれたことで、はたと我に帰る。

「おい、天草！　授業中にボーっとするな」

と、教壇に立って、数学の公式の証明をしていた教師が叫んでいる。

あぁ。

そういえば、今は授業中だったか。

「……すんません」

軽く頭を下げると、教師は黒板に向き直った。

一回、窓の外を見る。

もう午後だというのに、太陽が燦々と照りつけている。

暑い。

そんな暑さの中でも俺は、教科書に目を落とす振りをして、再び考えを巡らす。

つまり、あれだ。

叶わない夢は、ただただ微笑ましいだけ、というわけだ。

放課後になった。

放課後に一緒に遊ぶような親しい友達は、俺にはいない。

ただ――

「おーい！　つかさっち！」

……はぁ。

面倒なのに見つかった。

嫌々ながらも、一応、義理で後ろを振り向く。
そこにいたのは、

「やっほ！　今、帰り？」

栗色のロングヘアーに、人懐っこい笑顔。
そして、異様なハイテンションを携えた女がいた。
その名も、下地あかり（しもじあかり）。
俺の幼馴染みにして、我が校の生徒会長様である。

「見てわからないのか？」
「ん？　わからーん！」
「そうか、今帰りだ。じゃあな」

これ以上、こいつと関わるのは面倒だったので、そう言ってこの場

を去ろうとする。
だが、
「それはないだろう！」
止められた。
しかも、凄い力で肩を掴まれる。
地獄万力と言っても過言ではない。
「ってぇな！　なんだよ？」
「ん？　今日は司ん家行くから」
「は？」
「聞こえなかった？　だから、今日司ん家行くから！」
「……」
さっきも言ったが、遊ぶような親しい友達はいない。

いるのは、迷惑な幼馴染だけだ。

俺の家は、一般的な一戸建ての一般的な住居である。

一応、二階はあるが、ただそれだけ。

驚くほど広くもないし、驚くほど狭くもない。

そこに住んでいるのは、俺と両親。

そして――

「……ただいま」

「おっ邪魔しまーす！」

玄関のノブを回して、中に入る。
その後を、あかりが雪崩れ込むように入ってきた。
あかりのハイテンションな挨拶にも帰ってくる返事はない。
家の両親は共働きだから、それが当然だ。
靴を脱いで上がり、そのままキッチンへ。
冷蔵庫を開けて、麦茶をコップに注ぎ、一気に飲んだ。
太陽の熱で火照った体に、水分が染み渡っていくのが分かる。

「……」

きっと暑かっただろうな。
そう思った俺は、コップに麦茶を注いだ。
一つは、さっき俺が使ったコップに。
一つは、氷を入れて。

そして、もう一つは、羊が描かれたマグカップに。

俺は三つの麦茶を持って、二階に上がり、二つある部屋の、俺の部屋じゃない方に入った。

そこには、先に二階に上がっていたあかりと、

「あ、お兄ちゃん。おかえり」

いつものように、青白い顔でベットに横になっている俺の妹・陽香(はるか)がいた。

俺の妹・天草陽香(あまくさはるか)についての話をしておこうと思う。

元々、陽香は明るく気配りも出来、その上、勉強や運動も出来た娘だった。

クラスの、いや、学校の人気者と言ってもいいくらいだった。

だが、今から三年前、陽香が中学一年生になった時、

陽香は病を患った。

外を出歩くどころか、歩くこともままならないほどに体力がなくなり、それに伴い免疫力も下がる。

そんな病気だ。

様々な医者にかかったが、原因は一切不明。

治療をしようにも、本人の身体は健康そのものだったため、結局、精神的なものだろうと判断され、自宅で療養することになった。

だが、陽香は未だに治っていない。

死に至ることはないようだが……。

彼女の青春時代が病で消えてしまうのは、あまりにも可哀想だ。

可哀想、すぎる。

「ほら、陽香。麦茶持ってきたぞ」

そう言って、陽香にマグカップを渡してやる。

それを両手で受け取る陽香。

「ありがとう、お兄ちゃん」

儚げな微笑みだ。

今にも消えて、壊れてしまいそうな――

「おーい！　私にはぁ？」

と、精神図太そうなやつが言う。

「……ん」

適当に渡す。

すると、あかりは

「お茶菓子はぁ？」

なんてほざきやがる。

図太いというか、図々しい。

これから持ってくるつもりではいたが、このまま言いなりのようになるのは、癪である。

だから、陽香に聞くことにしよう。

「陽香もなんか食べるか？」
「あ、うん。ちょっとだけ食べようかな」
「わかった。持ってきてやるな」
「ありがと、お兄ちゃん」
陽香の言葉を聞いてから、部屋を出る。
「ふぅ」
扉を閉めると、ため息が出た。
暑い。
本当に暑い。
……。
いや、それだけじゃないな。

このため息は焦りや不安だ。

陽香を見ていると、本当に感じる。

『夢』は『儚い』。

そう感じてしまう。

だって、俺の『夢』は、陽香が元気になることだから……。

それは、叶いそうにない、だけど、微笑ましくなどない、切実で『儚い』『夢』だ。

2：凡

前にも言ったように、俺には放課後に遊ぶような親しい友人はいない。

それは、休日も一緒であり……。

「……なにしよう」

俺は現在、日曜日という一週間の中で最も喜ばしいであろう日を、部屋のベットの上で堪能していた。

現在時刻、午前十時。

つまり、目が覚めてから約一時間が経過したわけか。

このまま、二度寝するのもいいが、如何せん暑い。

とりあえずシャワーでも浴びようか。

そんなことを考えた、ちょうどその時である。

――ピンポーン

インターフォンが鳴った。

誰だろうか、と思いつつも、どうせ親が出るだろうと高をくくり、シャワーの用意を進める。

が、

――ピンポーン

「……」

――ピンポーン

「……」

――ピンポーン

「……」

――ピンポーン
――ピンポーン
――ピンポーン
ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン
ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン
ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン
ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン

「だぁぁぁ、分かった！　分かりました！？」

急いで階段を駆け下りる。

途中でリビングを覗いたが、どうやら親は二人ともどこかに出かけているようだった。

つまり、現在家にいるのは、俺と未だに眠っているであろう陽香の二人だけ。

……しょうがない。

「はいはい、今出ますよ」

玄関までたどり着いた俺は、そう言って扉を開けた。

そこにいたのは、二人の女の子。

一人は、俺と同じかそれ以上に背が高く、まるでモデルか何かのような体つきをしたつり目気味な子。

もう一人は、前髪が目にかかるくらいに伸ばし、びくびくとした様子で挙動不審に陥ってる子。

「おはようございます。せっかくの休日ですのに、また今日も家にいますのね」

嫌味たっぷりにそう言うのは、つり目の方だ。

「……ます」

前髪の方は、まったくもって聞き取ることのできない小さな声でそう言う。

おそらく「おはようございます」と言ったんだろう。

「あぁ、おはよう」

まぁ、どちらにも慣れたもので……。

とりあえず、俺は二つの見知った顔に挨拶を返した。

説明をしておこう。

彼女たちは陽香の友達である。

つり目の子が、鷹宮鈴奈（たかみやすずな）。

前髪の子が、烏羽風乃（からすばかざの）。

二人とも、陽香が病を患った時から御見舞いに来てくれている。

『親友』。

きっと陽香と彼女たちには、そんな言葉が相応しいだろう。

「それでは、失礼いたしますわ」

と、鷹宮が靴を脱いで家に上がってきた。

無遠慮な上に図々しい。

まったく、あかりと気が合いそうな奴である。

それに対して、

「……ぅぅ……」

烏羽は玄関で立ち往生していた。
どうしていいか分からない様子である。
見舞いを始めて、もう三年も経つのだから、いい加減慣れても良さそうではあるのだが……。
とにかく、だ。

「どうぞ」

そう促す。
俺の言葉を聞いて、ようやく我が家に上がる烏羽。
ちょこちょこと、二階に上がっていった。

「はぁ」

大きなため息をつく。

なんでこう、俺とか陽香の周りには面倒で『普通』じゃない奴が集まるのかねぇ……。

正直な話。
俺は『普通』から大きく外れたことが好きではない。

『普通』じゃない奴は、良くも悪くも注目される。
そして、色々な感情の捌け口になる。

憧れ
妬み
憐れみ
憎しみ

そんなのは面倒だろう？

だから、

人間は『普通』が一番だ。

――コンコン

「はぁい」

陽香の部屋のドアをノックすると、中から陽香の返事が聞こえた。

どうやら起きていたようだ。

「お茶菓子、持ってきたぞ」

そう言って、部屋の中に入る。

「ありがとう、お兄ちゃん」

「御苦労様」

「……ます」

三者三様の返事が返ってくる。
それを聞いて、立ち去ろうとした俺に、
「あら？　どこに行くんですの？」
鷹宮の偉そうな声がかけられた。
ほんと、よく人ん家でここまで尊大でいられるな、こいつ。
と、心の中で毒づきながらも一応振り返り、質問はしてやる。
「何か用でもあるのか？」
「わたくしはないですわ。……でも」
そう言って、鷹宮は陽香の方を見る。
その視線につられて陽香の方を見ると、

「……お兄ちゃん」

陽香が寂しそうな目で俺を見ていた。

その様子は、まるで捨てられた仔犬か仔猫のようである。

陽香がそんな目をする時は、決まって構って欲しい時だ。

そんな目をされては、立ち去れない。

で、結局。

「……しょうがない」

俺は陽香の近くに行って、腰を下ろした。

その途端に、陽香の顔が明るくなる。

その表情を見ると、少し安心する。

「今日は調子いいみたいだな」
「うん」
「でも、無理はするなよ？」
「分かってるよ、お兄ちゃん」
「なら、いいさ」

陽香の頭を軽く撫でてやる。

十六歳、学年で言えば、高校一年生の妹に、こんなことするのは、
些か子供扱いし過ぎかと思う。

だが、陽香はこうされるのが好きらしい。
普段、好きなことが出来ないのだから、この位はいいだろう。

「……ほんとに、仲よすぎますわねぇ」

と、そんな俺たちの様子に口を出す不粋な輩がいた。

見れば、その不粋な輩(たかみや)は、俺たちのことをじと目で見ている。

「……なんだ？」

「いえ、別に。ただ、年頃の兄と妹とは思えない仲の良さでしたので？」

「そう、かなぁ」

鷹宮の言葉に俯く陽香。

それに吊られたのか、烏羽も何故か俯いていた。

ちっ、余計なことを……。

心の中で舌打ちをし、毒づく。

もちろん、それは表には出さずに『普通』っぽく対応する。

「いいんじゃないか？　仲がいいことは悪いことじゃないだろう？」

「……」

少し間があって、

「……まぁ、そうですわね。変なことを言ってごめんなさい、陽香」

鷹宮がそう言った。

「え？　ううん、気にしてないから大丈夫だよ」

そう言った陽香にも笑顔が戻った。

これでいい。

陽香がこれ以上、元気を失うのは見ていられない。

俺の『夢』は、陽香が元気になることだと言った。

その『夢』のためにも、『普通』は必要だ。

俺が『普通』を演じれば、もしかしたら、陽香も本来の元気な姿を……『普通』を取り戻すかもしれない。

……。

……あぁ、分かってる。

分かってるさ。

そんなのは、ただの願望だ。

俺が『普通』を演じれば、陽香が元気になるなんて、そんなことあり得ない。

そんな夢みたいなことが起きるのなんて、それこそ、

『夢』の中でもないと、あり得ない。

3：遭

鷹宮と烏羽は、陽香の体調を考えたようで、一時間ほどで帰っていった。

俺はその後、

「そう言えば、お兄ちゃんはさっきまで何してたの？」

という、陽香の一言で、自分の身体が汗ばんでいることを思い出し、当初の予定通り、シャワーを浴びた。

そして、ちょうど正午を回った頃に、母親が帰ってきたため、俺は妹の様子を看るのを任せて、家を出た。

特に、行く当てはない。

ただの散歩だ。

行き当たりばったりの散歩。

無意識の散歩とも言えるかもしれない。

……。

いや、それだと夢遊病か何かのような表現だな。

まぁ、そんな全く建設的でもないことを考えて……。

と、まぁ。ここまでが過去の話である。

今現在の俺は、というと、

「なんで学校に来てしまったのだろう」

自分の通う高校に来ていた。

さっきも言ったように、これは散歩である。

別に、学校に思い入れがあるから来たわけでも、部活動をやっているから来たわけでもない。

つまり、理由はない。

まぁ、強いてここに来た理由を挙げるならば、たぶん習慣だろう。
惰性とも言う。

行き当たりばったりで、学校に着くというのも、些か微妙な心境ではあるが……。

「おーい、司ぁ」

不意に声がした。

俺は、ここまでハイテンションで人を呼ぶ人間を一人しか知らない。

というより、俺のことを名前で呼ぶ人間なんて、この学校で一人しかいない。

「……よぅ」

「おう、司！　二日ぶりだな！」

案の定というか、なんというか、そこにいたのは、下地あかりその人であった。

「どしたの、こんな休日に」

小首を傾げ、そう訊ねてくるあかり。

「散歩」

「おぉ、なるほど！」

単語一つだけで答えると、あかりは納得がいったかのように、声をあげた。

……とは言っても、だ。

俺が休日に外に出ることなんて、散歩以外にはあり得ないのだから、予想はついていたのだろうが……。

もしかしたら、さっきのやり取りは、会話を繋げるためのきっかけ

を作ったつもりだったのか？

……いや、ないな。

先程までの考えを否定する。

あかりは、そこまで思慮深くないだろうし、第一、俺に対して、今さらそんな気遣いをする必要もないだろう。

「どした？　考え事？」

「……いや、なんでもない」

難しいことを考えるのは、止めよう。

言葉の通りなんでもないのだ。

だから、

「じゃあな」

踵を返し、再び自由気ままな散歩に戻ることにした。

「……あっ」

「……つかさ……」

さて。

自由気ままな散歩と洒落こんだのはいい。

いいんだが……。

「ここはどこだ？」

俺は見知らぬ場所に辿り着いていた。

さっきのように、習慣やなにかで向かってしまう場所ならば、まだよかった。

だが、３６０。見渡してみても、そこは相も変わらず見知らぬ場所であった。

当然か。

とりあえず、ここまでの道のりを思いだそう。

いくら自由気ままだと言っても、意識はあったはずである。

当然のことながら、学校に着く前に言った、夢遊病云々は、冗談であるのだから。

……。

「……あれ？」

首を思いっきり傾げる。

その理由は明解だ。

ここまでの道のりを思い出せなかったから。

である。

「いやいや、待て待て」

自分にそう言い聞かせる。

そうだっ。
待てっ。

そんなこと……思い出せないなんてことはないはずだ。

とにかく、冷静に。
冷静になれっ、天草司っ。

とりあえず、状況を確認しよう。

周りを見渡してみる。

周りは、何もない。
そう、何もないのだ。

ただあるのは白い空気。
今までテンパっていて気がつかなかったが、この白い空気は霧のようだ。
少し肌寒さも感じる。

……はっ？
いや、待てよ。
……霧？
……肌寒さ？
さっきまで、まさに夏と言わんばかりの晴天だったのに？

おかしい。
明らかにおかしい。
さっき、ここを見知らぬ場所と定義した時は、こんな霧も出ていなかった。
それ以上に、何もないことはなかった気がする。

「何なんだ？　ここは、一体……？」

『教えようかぃ？』

「！？」

不意に声がした。

さっき学校で、あかりに声をかけられたのと、同じようなシチュエーション。

だが、その声に聞き覚えはない。

「だ、誰だ……？」

辺りを見渡すが、声の主はおろか、人っ子一人いない。

……空耳、か？

『いやいや、ここだよ、ここ』

声は、上から――、って、

「わぁぁぁぁぁぁ！？」

思わず、思いがけず、悲鳴をあげてしまっていた。

痩せ細ったただの骨のようなの手足。

それを隠すようにしながらも隠しきれていない白いマント。
そして、まるで、獣の面の皮を剥いで、そのまま張り付けたような仮面。
そんな化物が、空に、逆さまに立っていたのだ。
『悲鳴をあげることはないだろう？　ボクだって傷つくぜ？』
生々しい白い仮面が歪に歪む。
これは傷ついているのではなく、ただ笑っているのだと何故か理解する。
何故か分かった。
『ははは、中々にいいリアクションをするねぇ』
「……」
『君、名前は？』
「……」

『いやいや、聞くまでもなかったか、天草司くん？』

「……」

『おやおや？　悲鳴の次はだんまりかい？　情緒不安定だねぇ……』

目の前で。

いや。

頭の上で、『それ』は言葉を放ち続けている。

「……すぅ」

未だに混乱し続ける自分の脳に、酸素を取り込み、なんとか言葉を発する。

「……こ」

『んん？』

「ここは、どこで……あんたは……何だ……？」

どうにか発したその質問に、『それ』は再び口元を歪めた。

『何、ね……誰、と聞かない辺りは、中々に冷静なようだねぇ』

冷静？
そんなわけ、ないだろう。

もう一杯一杯だ。
今にも頭がパンクしそうだよ。

だが、『それ』の言葉を聞き逃さないために、俺は脳を、耳をフル稼働させる。

『……君の質問に答えよう』

『ここは、君達の世界で言う『夢』の中で……』

『ボクは、ここに、』

『『夢』に巣食う、ただの『羊』さ』

『敬意を評して、『羊様』と呼んでくれたまえ』

『……天草、司くん』

――この日、俺は出遭ってしまった。

一人の『羊』と。

『夢』の中に巣食うという一人の『羊』と。

俺の……俺達の日常と運命を変える一人の『羊』と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0577y/

我等は羊の夢を見る

2011年11月10日05時40分発行